

第 481 回 N S T新潟総合テレビ番組審議会

1. 開催日時 2025年10月22日(水) 11:00～
2. 開催場所 N S T新潟総合テレビ本社
3. 委員出席
○委員総数 8名
○出席委員数 8名（レポート出席を含む）
委員長 伊藤 満敏
副委員長 本田 賢一
委員 山田 富美子
委員 廣田 徹
委員 杉浦 一成
委員 槇 大介（レポート）
委員 吉田 謙佑
委員 岡井 美奈

（敬称略）

○放送事業者側

酒井 昌彦（代表取締役社長）
高島 裕介（取締役）
中馬 淳一（取締役）

大矢 光徳（番組説明・報道制作部）
武者 正人（番組審議会事務局長）

4. 議 題

(1) 番組審議

「長岡まつり 2025 戦災から 80 年の夜空に」

2025 年 8 月 16 日（日）14:00～14:55 放送（55 分番組）

(2) その他

視聴者対応、訂正・取消放送の報告、放送番組の種別の公表

配布資料

- ・議題・レポート取りまとめ
- ・BPO 報告（NO. 281）
- ・10－12 月 NST タイムテーブル
- ・放送番組種別の公表について
- ・第 73 回民間放送全国大会 配信のご案内

5. 議事概要

代表取締役社長 酒井昌彦から修正申告にかかわる外部調査委員会の 10 月 3 日の報告書受領、そして、その後の対応を報告した。

また、同日に公表した信頼回復に向けた再発防止対策について説明し、社内一丸となり社内体制の再構築を進めていくことなどを報告した。

(1) 番組審議

番組審議では番組制作者による番組概要・企画意図等の説明文と動画を送付し、委員より事前に提出されたレポートを取り纏め、審議会ではポイントとなる意見をいただく形式をとった。

- ・番組では長岡まつりが長岡空襲の悲惨さと平和の大切さを伝えるまつりであることを自然な流れの中で伝えていた。
- ・戦後 80 年という節目の年に、「慰霊」「復興」「平和」という長岡まつりの根底にあるテーマを、新潟県内の視聴者に改めて伝える強い意志を感じさ

せる構成になっており、制作者の想いが表現されている番組であったと思う。

- 空襲で亡くなった方々の慰霊と平和への思いを託して行われる柿川の灯籠流しや、平和学習で学んだことを下級生に伝えていく活動など、長岡市内の小中学校の取り組みも紹介されており、長岡まつりが戦災者の慰霊と平和祈念だけでなく、そうした気持ちを次の世代に伝えていく役割も担っていることが分かり、番組の奥深さみたいなものを感じた。
- 長岡市内に投下された模擬原子爆弾の生き証人の横山修次さんへのインタビューと、写真家大石芳野さんの写真展の話は 80 年の時を経て非常に貴重だと思う。
- 番組終盤で出てきた大花火大会は、ナレーションのうまさもあって、とても感動的に仕上がっていた。
- 新潟県民として長岡空襲についてはあまりにも知らな過ぎたと反省し、長岡市民の「語り継ぐ」ことへの強い思いと、企画力行動力に改めて驚いた。
- 駒形十吉氏の提唱で空襲の翌年から復興まつりが始まったとは全く知らなかった。そうしたリーダーがいた、呼応した商業団体市民がいた背景に、長岡の地域性があるのかと感じた。
- 戦争のない平和な世界を望む気持ちや、子どもたちには自分に何ができるのか考えながら育てて欲しい、より良い未来を創って欲しいと願う気持ちに共感し、思いのほか深い思索の時間となった。
- 番組冒頭から中盤まで、長岡空襲戦災から復興の歴史的背景、長岡まつりの成り立ちや起源を知る意味では良かった半面、題名の「長岡まつり 2025～」から想像した「祭り」の華やかなイメージと「戦災」を語り継ぐ重いテーマから表現された序盤の構成が、イメージとは違ったやや重たい番組構成にも感じた。

- ・ 悲慘な戦争を繰り返さない意味から慰霊と鎮魂、先人への感謝など年に1度の祭りのタイミングで、こうした番組を通じて県内外の多くの人々に伝える番組を作り続けて欲しいと思った。
- ・ もう一つの長岡空襲と言われた模擬原子爆弾「パンプキン」が投下されたことは、私も詳しく理解していませんでしたが、生き証人である横山さんの生々しいお話も聞き、新潟県民として長岡戦災資料館は必ず訪れ改めて長岡の歴史を学び直そうと思った。
- ・ 花火の映像では余計なナレーションを入れず演目を簡潔にナレーションで紹介し、花火自体の迫力を映像と音で味わってもらいたい意図を感じ、長岡花火の壮大で迫力あるところが十分表現されていたように思う。
- ・ 長岡花火は全国的にも人気のイベントでもあることから、その歴史的な背景は長く戦争のない平和な国を作ってくれた先人への感謝も込め、発信し続けて欲しいと思った。
- ・ 「大民踊流し」で、老若男女多くの市民が揃いの衣装で生き生きと踊りを楽しんでいる姿は、戦後、焼け野原から立ち上がった長岡市民の力強さと、明るい未来への希望を象徴していることが感じられた。
- ・ 番組のハイライトで映像が出た大花火大会の壮大な美しさは格別だった。ただ、疫神や死者の怨霊などを鎮めなだめるために行う御霊会が時代を経て祇園祭になっていったように、祭りの意味合いというものが時代を経て移り変わっていくことは、花火を見に来た県外からの観光客のコメントからも伺えるところだと思う。
- ・ この番組を視聴して、そうした変化を受け入れながらも、市民が歴史を忘れずに、次の世代に「慰霊」と「復興」と「平和」というテーマを引継ぎ、皆で地域を盛り上げようとする姿勢が、この長岡まつりを他の祭りにはない特別なものになっているのだと深く感じた。
- ・ 県外出身者だが、戦災からの復興や震災などの自然災害からの復興として「灯籠流し」「慰霊神輿渡御」などと同じように大花火大会が構成されている点を理解し、意義ある番組として毎年実施してもらいたいと感じた。

- 平和の視点からの具体的な「これから私たちにできること」の提案が、映像としてももう少し前に出ていてもよかったのでは、という気持ちがある。被災・復興・祈りの物語を映し出すだけでなく、視聴者一人ひとりが主体的に慰霊、復興、恒久的平和に関わっていく行動の道筋を提示する内容があれば、この番組はより力強いメッセージをもった番組になるのではないかと感じた。
- 追慕の集いで語られた星野さんの言葉からは、空襲の惨状が今も記憶に刻まれていることが伝わってきた。また、富山市で三世代にわたり語り継ぐ姿勢にも心を動かされ、若い世代が使命感を持って記憶を受け継ぐことの大切さを改めて考えさせられた。
- 表町小学校の平和を考える会では、下級生へ平和の知識を伝える活動が行われており、子どもたちが未来に平和の思いをつないでいこうとする姿が印象的で、歴史とは別に何を思うのか、平和とは何かをどのようにまとめたのか詳しい内容が気になった。
- 長岡造形大学の学生たちは、花火を楽しむだけでなく、その背景にある歴史を理解したうえで参加している学生も多くいる。県外からの学生も増えており、長岡の歴史や文化に共感する若い世代が広がっているように感じ、花火を単なる娯楽としてではなく、平和の象徴として捉える学生が多いことは、今後の地域の力になると感じた。
- 毎年、長岡まつりを「慰霊」、「復興」、「平和」の3本柱で毎年制作していることに敬意を表する。
- 長岡市民にとって8/1はとても忙しい日で、早朝6時に平潟神社の「戦災殉難者慰霊祭」、7時に昌福寺での「戦災受難者墓前法要」、8時に平和の森公園での「平和祈願祭」、9時にアオーレ長岡で「長岡市平和祈念式典」への参列がある。
- これら平和を尊ぶいろいろな行事を朝から時間をかけて丁寧に取材していたことが見て取れた。
- 戦争を経験した人が減る中、未来の子供たちに平和を語り継ぐ長岡の人の信念、よく表現されていると感じた。

- ・ 他の委員から「長岡魂」と言われたのがうれしかったが、長岡人としても番組ではよく表現されていると感じた。
- ・ 花火にうるさい側から欲を言えば、花火が煙で見えづらい点が気になった。信濃川左岸・右岸両方で撮影準備が必要だと思われる。風向きは予想できないので、花火の撮影の難しさを思い知らされた。

（２）その他

視聴者対応

資料に基づき、２０２５年９月分の視聴者対応について、事務局より報告を行った。

訂正・取消放送の報告

前回開催日～今回の開催前日までに総務省に届け出た訂正放送・取消放送はなかった。

放送番組の種別の公表について

資料に基づき、２０２５年４月～９月分について、事務局より報告を行った。